

國學院大學學術情報リポジトリ

五井昌久の思想形成にみられる他教団からの「影響」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 尚文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001428

五井昌久の思想形成にみられる他教団からの「影響」

吉田尚文

論文要旨

本稿は、白光真宏会びやくしやうしんこうかいの教祖・五井昌久いまいまさひさが立教までに受けた他教団からの「影響」えいきやうについて論じた。

生長の家の分派とされる同教団だが、五井は立教に至るまでに複数の教団に入信（入会）しており、それらの思想しきやうから「影響」を受けた。他教団とは、世界救世教・生長の家・千鳥会等である。

世界救世教（岡田）からは「浄化作用」、生長の家（谷口）からは「光明思想」、千鳥会（萩原）からは「フーチ」の「影響」

が見られる。他にも、心霊研究グループと交流があり、「心霊」思想の「影響」があった。

教団遍歴を経て、のちに同会の「教義」が成立する。五井が作成した「教義」の文言からうかがえる他教団の思想的「影響」を指摘した。他教団で獲得した教えが自らの教団の「教義」（思想）形成に反映したわけである。

「大本系」おほもとけいの先行教団を経由して後発教団（同会）に思想的継承が行われたといえる。

一、はじめに

本稿の目的は、白光真宏会びやくしやうしんこうかいの教祖・五井昌久（一九一六—一九八〇）の思想形成において、他教団の教祖らから受けた「影響」を明らかにすることにある。

先行研究さきこうけんきゅうにおいて同教団は「大本系」おほもとけい「生長の家分派」しやうじやうのけふんぱいに位置付けられている。これは、その通りであり、異論はない。

①『近代民衆宗教史の研究』〔村上 一九七二・巻末〕の「近代民衆宗教系統図」は、大本教（現・大本）から、いくつもの新宗教教団が派生していることを示している。白光真宏会は、同図に記されていないが、この「大本系」の流れに属することは確かである。なぜなら、五井はこの系統の教団（世界救世教⁵、生長の家等）の信者として活動していたからである。②『新宗教研究調査ハンドブック』〔井上ほか 一九八一・二〇二頁〕の「〈図一〉」大本系」によれば、白光真宏会は「生長の家から分派した教団」と位置付けられ、③『新宗教教団・人物事典』〔井上ほか編 一九九六・XXX頁〕の「大本系教団系統図」でも同様である。

三つの図から、「白光真宏会は大本を源として派生した教団群の一つであり、特に生長の家から分派して出来た教団」といえる。尚、五井自身が自らの教団をどのように位置付けていたかについて、弟子による著作『ある日の五井先生』では、以下のような記述がある。当時、同会青年部長だった清水勇の問いに五井が答えた内容だという。

あるとき五井先生にそのことをお訊ねしたら、「うちは大本教の流れだよ。大本教は文字とおり宗教の『おおもと』なんだよ。教祖が出口王仁三郎⁶で、まさに『宗教の出口』だね。出口から谷口（雅春、生長の家）が出て、谷口の脇から岡田（茂吉、世界救世教）が出たんだよ。つまり出口から谷口が出て、谷口から五井が出たというわけだね」

この記述の通りならば、五井自身「白光真宏会は、大本教の流れであり、谷口（生長の家）から派生した」という理解だったことになる。

本稿では、思想研究の観点から、生長の家の分派である同会が、他教団からどのような思想的影響を受けたかについて明らかにしていきたい。なぜなら、その前半生において五井は複数の教団（団体）の信者（会員）となつて活動し、それらの教団から「影響」を受けたと考えられるからである。

そこで、まず五井の思想の概略、特徴を説明しておきたい。後述するが、五井の思想は、一頁におさまるほどの短い文章からなる「教義（現在、「人間と真実の生き方」と題され、機関誌の巻頭に掲出されている。）」に、そのエッセンスがすべて込められている、といえる。五井による解説をまとめた小冊子『人間と真実の生き方』（白光真宏会出版本部、二〇〇八年〈五版〉〈初版一九九八年〉）を参照すると、要点は次のとおりである。人間は本来「神の分霊であり、神の子である」が、この世界の業想念の波が烈しいために、その

影響を受けて悪行為をしてしまうことになっている。しかし、人間には各人に「守護霊」および「守護神」がついており、守ってくれている、という。五井は「(想念)波動」の重要さを強調し、各人がより微妙な「霊波動」「光明波動」となることを目指す。人間は「守護霊、守護神」に常に守られていることを感謝しなければならない。人生において不幸や苦悩に見舞われることがあるが、それは過去世から現在に至るまでの業想念(誤てる想念)が「消えてゆく姿」である。現われれば必ず消えるものだから、不幸災難の中にあっても、それは「消えていく姿」として、「世界平和の祈り」を日常生活の中で続けてゆくことを推奨している。「世界平和の祈り」には絶大な力がある、とされる。想いにおいて、「自分を救し、人を救し」「責め裁かない」で、徹頭徹尾「世界平和の祈り」を行じること、自他を浄め、自分を救い人類に平和世界を導き出すことになる、という。

こうした五井の思想の特徴をふまえた上で、次章より、他の「大本系」教団(教祖)からの思想的影響を検討していく。

二、他教団教祖からの「影響」

五井の思想形成に関わる「影響」のすべてを解明するのは難しいが、五井自身の記述等から断片的に知ることは出来る。まずは、五井の著作『天と地をつなぐ者』⁽⁷⁾を中心に、思想的影響を見ていきたい。

(一) 岡田茂吉(世界救世教)

五井が岡田の思想に触れたのは、「終戦半年位前に腎臓を病つた」⁽⁷⁾「前掲書、五井 一九五五・二二頁」ときである。「工場の勤労課に働いてゐた幸田さんと云ふ事務員の女性から、今の世界救世教、^{メシヤ}其の頃、日本浄化療法と云つてゐた岡田茂吉氏の明日への医術と云ふやうな題名の著書を借りて」「同・同頁」読んだことによる。岡田の「理論」について五井は、以下のように説明する。

岡田茂吉氏の理論は、人間の病氣はすべて毒素排泄作用によつて起るのである、と云ふ。毒素の中には先天的、即ち先祖からの罪穢れ、過去世の業の現はれ、と薬毒によるものがあつて、その毒素が熱によつて溶融されてゆく姿が病氣である。其の溶融させ

る熱は、人間自体のもつてゐる自然療能的治癒力がなすので、熱を発して体が苦しんだとしても、それは毒素の浄化であつて決して悪い状態ではない、人間の体が浄まつてゆく作用である。それをわざわざ薬を用ひて、自然療能的熱を抑へ、毒素を再び固めてしまひ、更に薬のもつ毒素を加へてしまふ。だから、薬の種類が増すごとに、益々人間の体に毒素がふえ、病気が浄化しにくくなり、種々の重病が起つてくる。すべて自然に逆ふからいけないので、自然にさからはず自然療能にまかせておく方がよい、と云ひ、人間の掌からは霊線と云つて神からくる光が出てゐるのだから、その掌を人間の浄化の中心である腎臓を主にして、それぞれの個所に当て、やれば、浄化を速進^{マツ}させ、病気が速かに痛み尠く全治する、と云ふのであつた。「同…二二—二二頁」

とある。五井は「私は其の理論にすつかり共感した」「同…二二頁」と述べている。続けて「私の病弱を克服してきた過去の体験が、医者と薬を捨て、自己の治癒力にゆだねきつた事にあつたからである」「同…同頁」と、五井がそれまでに体験的に自覚していた「思想」を、岡田の「理論」が強化したといえる。

岡田の「理論」のうち、五井がまず取り入れたのが「霊線療法」だった。「私は幸田さんに伴はれて、Y氏と云ふ第一級に位する弟子の治療所を訪づれた」「同…二五頁」。五井自身、「明日への医療の中に書いてある事、掌から霊線と呼ばれる強い光が放射されその力が人間に作用すると云ふ事はあり得るに違ひないと一度でうなづける」「同…二六頁」と述べ、「その日以来、時折りY氏を尋ねて、岡田氏の思想や生き方を聴いたり、霊線療法の講習を受けたりした」「同…二七頁」と記している。

五井は、習つた「霊線療法」で病氣治しを行った。「私はY氏から受けた霊線療法を、幸田さんの家で実施してゐた」「同…同頁」。「私は幸田さんの家を根拠にして、次々と病氣治しに歩いてゐた。病人に掌をかざして、震動させたり、指圧のやうに指で押したりしてゐるうち、かなりの治病効果があつた」「同…二八頁」という。このように、病氣を治す方法として、この手かざし「療法」を学び、病氣治しに用いたことは、岡田からの「影響」の一つに挙げられる。

岡田からの思想的影響の中で重要なものに「浄化作用」という考え方があつた。

五井は、前掲引用のように、「病氣で—吉田註）熱を發して体が苦しんだとしても、それは毒素の浄化であつてけつして悪い状態ではない、人間の体が浄まつてゆく作用である。」「同…二二頁」と、岡田の「理論」を説明している。この「理論」に五井はまったく同

意している。実際、敗戦直後の頃、「四十度近い高熱が幾日もつき、息づかひが烈しく、頭の天つぺんから足の先きまで痛まぬところはなないと云ふ状態」〔同…二三頁〕になったが、「自分自身の生命力で癒される事を確信してゐた」〔同…同頁〕という。そして、結果的に「十日程して病気は全快した。」「同…二四頁」といった経験をしており、五井の以降の人生においても、岡田の「浄化作用」の「理論」は五井に「影響」していたと筆者は見ている。

前掲の引用中、「毒素」の中の「過去世の業の現はれ」〔同…二二頁〕の部分は、五井の「教義」における「消えてゆく姿」の教えと相通じるものがある。五井は、病気も含めて現在の苦しみは「過去世からの誤った業想念」が今現われているのであり、例えば病気として「現われれば（過去世からの誤った「業想念」はその分―同註）消える」と説いている。つまり、病気（発熱）などを経て（現われて）、「浄化」された（消えてゆく）、という考え方である。この五井の「教え」は、岡田の「理論」に通じるもので、岡田の「影響」をうかがうことが出来る。

前掲の引用中、「毒素」には「先祖からの罪穢れ」〔同…同頁〕がある、との岡田の「理論」を五井が述べている。ここでの「（先祖からの）罪穢れ」は「先祖からの」業」と理解することが出来るだろう。これに関して、五井は養女・西園寺昌美の名著『明日はもっと素晴らしい』の「序文」において、「昌美は琉球王朝の末孫の為か、琉球関係の業の渦を一身に背負うようなことになりまして、十代後半から体が硬直してしまい、しゃべることも身動きもできなくなってしまうような病気が時折り起り、医師も手のつけようのない状態になってしまいました。」¹¹と述べている。

「先祖からの罪穢れ（業）」という「毒素」を昌美が身に受けて、重病の状態になっていた、というのである。五井は昌美を千葉県市川市の本部道場にあずかつて看護したわけだが、これについては「地球援助の神々や昌美の守護神方が、昌美を地球救済の大きな力にしようと思われて、琉球の業の浄めと同時に、守護の神霊や宇宙天使との交流を完全なものにしようとなさって、私にあずけられた」¹²前掲書、西園寺 一九八六（一九七九）…一一―二頁」と解釈している。つまり、昌美には「先祖（琉球）の業の浄め」という役目もあって重い病気を患うことになった、という。こうした説明は、先に引用した岡田の「理論」に挙げられてある通りで、「先祖からの罪穢れ」という「毒素」が病気として現われた、ということである。岡田の「理論」と考え方を同じくしており、岡田の「理論」から「影響」

を受けている可能性がある。

また、前掲引用の「毒素」の中には「薬毒によるもの」「前掲書、五井 一九五五・二二頁」がある、と五井は「岡田の理論」につき説明している。岡田の「理論」として、薬の弊害に関し「わざわざ薬を用ひて、自然療能的熱を抑へ、毒素を再び固めてしまひ、更に薬のもつ毒素を加へてしまふ。だから、薬の種類が増すごとに、益々人間の体に毒素がふえ、病気が浄化しにくくなり、種々の重病が起つてくる。」「同・同頁」と述べている。

前述のように敗戦直後、高熱が幾日もつづいた時も、五井は「医者にかからないので病名は判らない」「同・二三頁」けれども、「医者と呼ばうとするのを、私は切れく／＼のけわしい言葉でさえぎつた。」「同・同頁」という。五井は「私の病弱を克服してきた過去の体験が、医者と薬を捨て、自然治癒力にゆだねきつた事にあつたから」「同・二二頁」と、同「理論」に共感した理由を記している。岡田の「理論」を読む前から、五井自身の体験として、医者や薬に頼らない、という考え方があつたが、岡田の『明日の醫術』によって、より「確信」を得たのであろう。岡田の「薬毒が病氣の原因であつて、熱は其の薬毒を溶解させる為に起る、と云ふ理論」「同・同頁」を、「その断乎とした書きぶりが心地良かった。」「同・同頁」といい、五井は岡田に「非常な興味を感じた。」「同・同頁」そうである。関係者（側近）によれば、実際、後半生において、五井は医者にかからず、薬を服用しなかつたという。最晩年に家族の懇願により、会員の医師が処方した薬を口にしたが嘔吐し、自らの意思では服薬しなかつたそうである。五井の場合、自分の身に現われる病患の現象を、「浄化作用」と理解していた。

五井は自身が病に苦しむことを通して「地球（人類）の業」を浄めている、という考え方があつたからこそ、薬を用いて「毒素（業―同註）」を固めてしまうようなことをしようとしなかつたのだろう。五井は、戦後まもなく葛飾の中川土手で自分の命を神に捧げる覚悟を「天声」に向かつて表明しており「同・三六頁参照」、命を失つても「人類の業の浄め」を遂行することを考えたと思われる。ゆえに、自身の病苦は「浄化作用」の促進であるから、「浄化」をさまたげる「薬」を受け入れるわけにはいかなかつたのであろう。晩年、症状が重くなる中であつて頑なに「薬」を拒みつづける五井の姿は、岡田の「薬毒」という「理論」の影響を感じさせるものがある。

(二) 谷口雅春 (生長の家)

谷口からの「影響」を見ていく。

五井は、岡田の弟子から「霊線療法」の講習を受けていたのと同じ頃、「音楽家の友人M君の家で、ふと眼について借りて来た、ホルムスト云ふ英人の書いたものを谷口雅春と云ふ人が訳した百事如意と云ふ本(註)を読んだ。この本は非常に私の興味をひいて、一気に読んでしまひ、何か眼の前が一度に開けたやうな深い感銘を受けた」「百事如意を読み終ると、此の人の書いた別の本を読んでみたい、としきりに思つた」「前掲書、五井 一九五五・二七頁」と述べている。この本は、「三界唯心」を説くもので、谷口の教えが生まれる出発点となった本の一つである。谷口は「『三界唯心』であるが故に、此の世界は何事も思ふまゝに成就することを知り、人生に處して百事如意の方法を獲得したのである。本書は此の百事如意法の紹介である。」「前掲書、谷口 一九四〇(一九三八)・五頁」といい、生長の家の基本的な教えの一つ「唯心所現」に結びついた。

そして、「私は治療をつゞげながら、色々の宗教書や哲学書を読みあさりしてゐた。その中にAと云ふ友人から借りた谷口雅春氏の生命の実相があつた。全篇二十巻をまたたくまに読み終つて、私の知らない別世界が如実に存在してゐる事、私たちの肉体は人間の一つの現はれでしかない事を、はつきり認識したのであつた」「前掲書、五井 一九五五・二九頁」と述懐している。

敗戦から間もなかつた当時、五井は、岡田や谷口を「二人の超人」「同・三〇頁」と思い、その二人が「共に霊界の存在を書き、魂の個性的存続を実証しようとしてゐる」「私は此の二人の実証によつてと云つても書物の上の事なのにくろりと靈魂存続論者に一変してゐた」「同・同頁」とあるように、書物からとはいへ、五井は自身の考えが変わつたことを認めている。

五井は、生長の家本部で谷口の講話を聞き、「谷口雅春先生の講話の内容の素晴らしさと、その話術の巧みさが、私の魂をしつかりと把へていつた」「同・四二頁」、「此の日は感涙のうちに、最後の神想観と云ふ祈りの行事を終つて帰宅した」「同・四三頁」という。谷口の教えに心酔し、生長の家の活動に熱心となつた。「近辺の誌友に呼び掛けて支部結成に奔走し、葛飾信徒会をつくり、先輩を会長にして、私は副会長になり、生長の家光明思想普及に一身を捧げつくさうと、熱烈な意気で同志獲得に乗り出してゐた。谷口雅春の草

履取りにならう、と言ふのが其の時の気持であった」〔同…四四頁〕というほどである。

谷口の書物を読んで、「生命の実相の根柢（つもと）を流れてゐる、人間神の子、実相円満完全、人間の本来性には悪もなく悩みも病苦もないのだ、と喝破してゐるその思想に深く打たれ」〔同…四二頁〕て、「信徒会」の副会長になり、「生長の家講師」にまでなつた。谷口の思想の「影響」を受けてのことである。

(三) 萩原真（13）（千鳥会）

五井は、「私は幸田さんからY氏（岡田の弟子―同註）のところでC会（千鳥会―同註）と云ふ神霊現象の会が行はれる事を聞き、その会の会員となつた。C会は、心霊科学協会（日本心霊科学協会―同註）から分れた会で、H（萩原―同註）霊媒とS（塩谷信男―同註）博士を中心に発足したばかりの会」〔前掲書、五井 一九五五・八八―八九頁〕とあるように、千鳥会の会員となつた。「もつと高度な神霊の出現するところを識りたい、と思つてゐた」〔同…八九頁〕と入会の動機を述べている。

生長の家の信者でありつつ、現実の具体的問題を打開する「超人的力」〔同…九〇頁〕を欲していた五井であり、生長の家の教えに「他の何処からか、それにプラスする力を得たい、と切望する気持になつてゐた」〔同…九一頁〕のである。

当時の千鳥会は、「会員の中には生長の家関係の人たちが、かなり顔をみせてゐた。」「同…同頁」というように、「生長の家関係」の人たちを引きつけていた。五井も含めてこうした人たちは、「物理霊媒実験会」といった「心霊運動」に関心をもつていたようである。尚、「生命の実相」によると谷口は、生長の家を立ち上げた後も「ところで生長の家出版部でも昭和八年二月二十八日、この物理的心霊現象の霊媒（亀井三郎―同註）について招霊実験を行なつたのであります。」とあるように「心霊」に関心を持ち続けていた。世界救世教、生長の家、日本心霊科学協会、千鳥会、そして五井においては、「心霊」という関心を同じくしていた。

五井が具体的に千鳥会から得たものは、「フーチ（五井は「扶札」と表記。扶札のこと―同註）」だった。千鳥会の「交霊会」では「交霊会の始まる前に、扶札（フイチ）を受ける人々の申込みがあり、申込順から定められた人員だけが、扶札（フイチ）を受ける事になつた」〔同…九二頁〕とある。ちなみに、一九四九（昭和二四）年頃の千鳥会誌には、「一、扶札 当日御希望ノ方ニ扶札ヲ行ヒマス。約十名内外ノ予定デス。」

『千鳥』一九四九年六月号・表二頁」とある。そして五井もフーチを受けることになり、五井の貰ったフーチには、

百知不及一真実行（百知は一真実行に及ばず（「百知は及ばず、一真実行」とも読める―同註））

誠実真行勝万理識（誠実真行万理を識る（「万理の識」「万の理識」とも読める―同註）に勝る）

〔前掲書、五井 一九五五・九二頁〕

と書かれてあった、という。「この言葉は私にとつて非常に有益なものであった事を今にしてはつきり思ふのである」〔同・同頁〕と述懐している。千鳥会でもらったフーチは、五井にとって「非常に有益なもの」として「影響」を与えた。

（四）心霊研究グループ

岡田、谷口、萩原ら、「大本系」の流れにあった教祖は「心霊」の知識の吸収につとめていた。同様に「大本系」に位置付けられる五井も、国内外の心霊思想に関心を示し、学んでいた。戦後まもない頃、尊敬する岡田や谷口が、「魂」や「霊界」について著述していた「影響」を受け、「私は其の頃を機として霊界幽界の研究と、人間の真毘（マコト）（神）を求める必死永生の第一歩を進めた」〔前掲書、五井 一九五五・三〇頁〕と述べている。「色々な霊媒を尋ねて、霊魂の存在を確かめたり、心霊問題を取扱った図書を探し歩いたりして」〔同・四〇頁〕いたのである。

さらに、「私は以前から、心霊科学協会（日本心霊科学協会―同註）の物理現象実験会に参加してゐて、メガホンが飛んだり、机が動き出したり、時折り霊魂の声を聞かされたりしてゐた」〔同・八九頁〕、「私は其の頃（一九四九（昭和二四）年一月頃―同註）迄に種々の行者や霊媒にも会ひ、様々な霊現象を見たり、生長の本家の本や、外国の翻訳本によつて、心霊に関する知識はかなりもつてゐるつもりでいた」〔同・九四―九五頁〕、と記されるとおりである。

これらの記述を見れば、心霊思想の「影響」のもとにあったことは確かといえる。

五井の側近によると、財団法人日本心霊科学協会の粕川章子（19）や、心霊研究団体「菊花会」の小田秀人とも交流があった、という。小田との交流については前掲『ある日の五井先生』に、次の回顧録がある。

五井先生からお呼びがかかって昱修庵のお部屋に伺ったのは、たしか一九七六年（昭和五十一年）の春先の頃でした。先生が白い角封筒をお示しになって、「ここへ行ってきなさい」とおっしゃいました。封筒の中を確認したところ一通の案内状が入っており、それは心霊研究会である菊花会の総会が深川の富岡八幡宮で開かれるという内容でした。

菊花会は小田秀人氏が主宰している日本で有数の心霊研究会で、五井先生がその会員になっておられたのです。先生は角封筒とは別に二つの祝儀袋もお出しになって私に託されました。一つは会費でしたが、もう一つはお祝い金でした。（中略）

（略）…まさか五井先生が菊花会の会員で心霊研究会の応援をなさっていらつしやり、私が先生のご指示で交霊会に出席したとは、村田長老には知る由もなかったのでしょうか。

心霊研究会を通して宗教的世界維新運動に生涯をかけておられる真摯で誠実な小田秀人氏に、五井先生は惜しめない声援を送っておられたのです。昭和五十五年八月、五井先生がご帰神になられた時の葬儀に、弔問者の一人として小田秀人氏の姿をお見かけいたしました。「前掲書、清水 二〇〇七（二〇〇六）…二二―一五頁」

このように、五井は菊花会の会員となり、同会および小田の「心霊研究」に物心両面の支援を行っていたことが分かる。日本心霊科学協会の粕川は、五井が提唱した「世界平和の祈り」の英訳を最初に行った⁽²⁰⁾という「五井の側近」。心霊研究グループ・人脈をとおして、五井の終生に至るまで、心霊思想の「影響」が及んでいた、といえるだろう。

三、「教義」にみられる他教団からの「影響」

「教義」の形成過程を見ると、会が宗教法人化した一九五五（昭和三〇）年までに、五井の「教え」はおおむね固まっていた。機関誌『白光』の創刊後⁽²¹⁾、早々に「祈り⁽²²⁾」と「教義」が誌上に掲載され、小さな変化はあるが、大々的な変更はない。

現在の「教義（人間と真実の生き方、という題で掲載―同註）」を以下に記す。

人間と真実の生き方

人間は本来、神の分霊わけたまであつて、業生ごうじやうではなく、つねに守護霊しゆごれい、守護神しゆごじんによつて守られているものである。

この世のなかのすべての苦悩は、人間の過去世かこせから現在にいたる誤あやまてる想念そうねんが、その運命と現われて消えてゆく時に起る姿である。

いかなる苦悩といえど現われれば必ず消えるものであるから、消え去るのであるという強い信念と、今からよくなるのであるという善念ぜんねんを起し、どんな困難のなかにあつても、自分を救ゆるし人を救し、自分を愛し人を愛す、愛と真まことと救しの言行げんこうをなすつづけてゆくとともに、守護霊、守護神への感謝の心をつねに想い、世界平和の祈りを祈りつづけてゆけば、個人も人類しんも真まことの救すくいを体た得とく出来るものである。『白光』二〇一五年九月号・巻頭頁]

「教義」が初めて記されたのは、一九五四（昭和二九）年二月二五日付の「宗教法人五井先生讃仰会設立公告」においてであり、『白光』誌上に掲載された。以下、「公告」中の「教義」の箇所を記す。

教 義

人間は本来、神の分霊であつて、業生ではなく常に守護霊、守護神によつて守られてゐるものである。此の世の中のすべての苦悩は、人間の過去から現在に至る誤あやまてる想念が、其の運命と現はれて消えてゆく時に起る姿である。如何なる苦悩といへど現はれば必ず消え去るものであるから、消え去るのであると云ふ強い信念と、今からよくなるのであると云ふ善念を起し、どんな困難の中にあつても愛と真と許しの言行をなすつづけてゆくと共に、守護霊、守護神への感謝の心を常に想ひつづけてゆけば、人間は真の救ひを体得出来るものである。と説く。『白光』一九三〇年一月号・二六頁]

同讃仰会を宗教法人として設立するにあたり、申請のため五井に「教義」の執筆を依頼したところ、その場で短時間（二〇分ほど）で書き上げたものである、という「前掲書、清水二〇〇七（二〇〇六）…二一五頁」。すでにこの時点までに五井の中で「教義」はほぼ出来上がっていたといえよう。

本稿は、五井昌久の「思想」すなわち「教義」の形成にみられる他教団からの「影響」を明らかにするものである。ゆえに、「教義」

中のキーワードごとに、あらためて他教団からの「影響」を確認したい。

① 「神の分霊」

五井は、生長の家について「人間神の子、実相円満完全、人間の本来性には悪もなく悩みも病苦もないのだ、と喝破してあるその思想に深く打たれた」[「前掲書、五井 一九五五・四二頁」と述べ、「教義」の中で人間が「神」と同質の「神の分霊(神の子)」と言っている。真の道でも『導きの葉』において「私たちは神の子であり、神から生命を授けられた人間は、神の本質に通ずるものをみな持っている神聖な存在⁽²³⁾」と、生長の家同様のことを言っている。また、「大本」でも一八九三(明治二六)年の「お筆先」(『大本神論』)で「もとは神の直系の分霊⁽²⁴⁾がさずけてあるぞよ。」とある。世界救世教も『天国の礎』で「人は神の子であり、神の宮であるといわれるが、既説のごとくそれは神から受命⁽²⁵⁾されたすなわち神の分霊⁽²⁶⁾を有しているからで」と述べている。つまり、前述「大本系」(「神道系」)教団において、「神の分霊」の教えは共通認識であることが分かる。どの教団からの「影響」というよりは、共有する考え方、といえる。

② 「守護霊、守護神に守られている」

「大本」では、「守護霊」と言わず「守護神」と言うが、世界救世教、生長の家、千鳥会(真の道)においても、同じような考えである。地上の人間は、そうした存在に四六時中守られている、とされる。前述の教団がおおむね受け入れていた内外の「心靈運動」の「影響」を五井も同じく受けていたのである。

③ 「苦悩は現われて消えてゆく姿」

五井は、自身の「光明思想」として、この教えを打ち出した。「悪と現はれ、不幸と現はれてきた環境はすべて過去世の誤つた想念⁽²⁷⁾や行ひが今現はれて消えてゆく姿なので、何も恐るる事はない。消えれば必ず、それだけ魂が浄まつて、運命が開いてくる」[「前掲書、五井 一九五五・一四九頁」という。生長の家の谷口が説いた「精神分析⁽²⁸⁾」は、現在の悪や不幸の「原因」は現在生きる人の心の誤りにある(「三界唯心所現」)、とした。この教えによって、不幸な状態にある信徒は自らの心(あるいは、他の信徒の心)を責める傾向が見られたようである。これを解決する考え方として、「消えてゆく姿」という教えを前面に打ち出したのだった。五井は、現在の人間のせいではなく、(人間の「靈魂」が永遠で、生まれ変わることを前提にして)その人の「過去世」の想念や行いに誤りがあつて、

それが「業」として現在現われている、とした。そして、不幸であっても、いったん不幸として現われることで「過去の悪業」が消えてゆく、「(悪)業」が消えればそれだけ魂が浄まり運命が開いてゆく、と未来を「光明」方向にとらえるよう導いた。生長の家に出合った初期の頃は、谷口に心酔し「三界唯心所現」の教えを本に書いてあるとお受け取っていた。しかし、のちに、この教えのマイナス面に気づくことになった。問題は、ポジティブな心や言葉によってそうした世界を現わすというほうではなく、「不幸な現われ(果)」をもたらした原因を「心の誤り」に求めたことにあった。それが、谷口の「精神分析」であり、五井はこれを批判した。そして、「人間神の子」(実相論)と「心の影」(現象論)の二つの教えから生まれる葛藤を克服しようとした。結果的に、五井は「実相論」一本でいくことを選択し、それが五井の「消えてゆく姿」という教えだった。「教義」の主要部として打ち出している。

ただし、そうした五井の主張のいっぽうで、この「消えてゆく姿」という考え方が五井の独創だったかという点、全くそうとは言えない面がある。例えば、谷口は『聖經 四部経』中、「聖經 続々『甘露の法雨』」で「肉体に激変起るとも恐ること勿れ。高く建ちたる建物の壊れるときは轟然たる響を發せん。その轟然たる響にも似たる病変は高く建ちたる汝の過去の迷いの消ゆる響なり。迷いの建物低ければ激動少し。迷いの建物高ければ激動多し。されど此らの病変を恐ること勿れ。壊れるものは汝自身に非ずして「迷い」なり。」と記してある。前の引用文の「建物」「迷い」を「業」と置き換えると、肉体の病変(病氣)は業が「壊ける(消えてゆく)」姿、と読むことが出来る。この場合、「過去の迷い」の「過去」を「過去世」の意味で言っているかどうかは分からないが、「迷い(業)」の消えてゆく姿、と解釈することは可能だろう。『大和の国 日本』に掲載されている「終戦後の神示(一九四五年一月二十七日未明神示)」にも、「これから八十禍津日神、大禍津日神など色々の禍が出て来るが、それは、日本が『穢き』心になつてゐたときの汚れが落ちる働きであるから憂ふことはない。この褻祓によつて日本國の業が消え、眞に浄まつた日本國になるのである。」とある。禍(まが)が出ることによつて(國の)業が消え、浄まる、というのは五井の「消えてゆく姿」の教えと似ている。

ちなみに、五井は、「其の頃(一九四六(昭和二一)年九月頃―同註)の私は、生長の家の真理の言葉、生命の実相に書かれてある様々な説明を限なくと云ふ程覚えてゐた。」「前掲書、五井 一九五五・五八頁」という。戦後まもなくから熱狂的ともいえる生長の家信奉者だった五井であるから、生長の家の經典である『聖經』(続々甘露の法雨)は一九四三(昭和一八)年一月発表)や前述「終戦後

の神示」の内容を知っていたのではないだろうか。「消えてゆく姿」という「教義」においても、いくらか生長の家・谷口の「影響」が考えられる。

岡田からの「影響」はより明確である。前述のように、「毒素の中には先天的、即ち先祖からの罪穢れ、過去世の業の現はれ、と葉毒によるものがあつて」、「熱を発して体が苦しんだとしても、それは毒素の浄化であつてけつして悪い状態ではない、人間の体が浄まつてゆく作用である。」「前掲書、五井 一九五五・二二頁」と、五井は岡田の「理論」を説明する。そして、「私は其の理論にすっかり共感した」「同・同頁」と述べている。筆者が注目するのは、「毒素」の中に「過去世の業の現はれ」が挙げられ、それが現われて（肉体が）苦しむことがあつても、それは毒素が「浄化」されているのであつて、それで「浄まつてゆく」という部分である。これは、まさに五井の「教義」の「消えてゆく姿」とほとんど同じ道理である。ここでは、「病氣」について述べられているが、「過去世の業の浄化」というのは、岡田の「理論」からの「影響」と見ても無理はないであろう。

④ 「信念、善念」

「苦悩は―同註）消え去るのであるという強い信念」と「今からよくなるのであるという善念」を起すよう、五井は「教義」の中で説いている。「光明思想」の点で、生長の家の教えの「影響」が見られる。例えば、谷口は前掲『聖經 四部経』『聖經 天使の言葉』で「信念を変えればまたその相も変化せん」^{すがた}「前掲経本、谷口 二〇一二・二九頁」、「汝ら常に『健』^{けん}を念じて『病』^{やまい}を念ずること勿れ。」「同・三四頁」と記してある。また、『聖光録』に収録の『生長の家 信徒行持要目』にも、「五、常に人と事と物との光明面を見て暗黒面を見るべからず。」³⁰とあるように、考え方は同様である。

⑤ 「自分を赦し人を赦し、自分を愛し人を愛す」、「愛と真と赦しの言行」

五井は生長の家の信徒時代を振り返り、「自己に相対する人間の心の間違ひを、精神分析的心の法則論で、しきりに責め立ててゐる」³¹「前掲書、五井 一九五五・七六頁」、「人間の弱点に切り込む責め道具、心の法則と云ふ精神分析を教へ込む生長の家思想」³²「同・七七頁」、「赦しの心、愛の心に非常な雲がかかつてしまふ。」「同・七八頁」と述べている。いっぽうで、五井自身の教えは「現在の人間の中に一点の悪をも認めぬ愛と赦しの教なのである。」「同・七九頁」という。

また、五井は『失望のない人生』において、「人間は、善人であればあるほど、自分の誤ちを責め裁きやすい。(中略)そこで私は、私の教義の中に、自分を赦しという一行を加えたのである。」と記している。

会の初期、一九五七(昭和三二)年、「教義」に、「自分を赦し人を赦し、自分を愛し人を愛す、」『白光』一九五七年二月号…表二頁』の文言が挿入された。これは、「心の法則論(精神分析)」を用いて自分や他人を責め裁きがちだったという生長の家の教えを振り返っての反省(教訓)とも受け取れる。谷口の説いた「精神分析」の教えを見直すことを通して、自分を責めず他人も責めない、自分も他人も赦し愛する、という「教義」に結びついた、といえる。

そして、千鳥会で五井がもらったフーチのとおり、谷口のような豊富な知識(百知、万理識)よりも「愛と真と赦しの言行」(一真実行、誠実真行)を重んじた。これも、他教団(千鳥会、生長の家等)からの「影響」に数えられよう。

四、おわりに

五井は、これまで論述してきたように複数の宗教家から思想的影響を受けた。そうした影響下に形成された五井の根本思想について述べたい。筆者は、五井の思想的中心は「世界平和の祈り」と考える。生長の家や真の道といった教団にも「祈り」が多数存在する。しかし、五井は複雑・難解であることを避け、「祈り」を単純化し、「祈り」を一つとした。この「祈り」の大衆化の方向性は、生長の家・谷口らの「祈り」の煩瑣なところを解消した。「単純化傾向」(津城 一九九〇…八五頁)へ向かったのは、反面教師的に谷口らの「影響」があつたのこともいえるだろう。

「教義」の中に書かれてあるが、五井はこの祈り言葉(となえ言葉)を通して、個人の幸福と人類の平和が同時に成就する、という。『縮刷版』新宗教事典 本文篇の「となえ言葉」の項を参照すると、新宗教教団ごとに様々な「となえ言葉」のあることが分かる。五井の「世界平和の祈り」は、「頻繁に繰り返しとなえられる言葉」(前掲書、井上ほか編 一九九四…三六一頁)に該当するが、新宗教における日蓮宗の系統に属する教団の「南無妙法蓮華経」のほか、「南無阿弥陀仏」といった「となえ言葉」と一線を画すものがある。

それは、五井の「世界平和の祈り」は、TPOを問わないことに加えて、この「となえ言葉」を想うことで個人の平安・人類の平和をもたらす、と説く点にある。五井は「心霊主義」の考え方同様に、「想念波動」を重視する。「想念」において人類の平和を願う「世界平和の祈り」を通して、世界人類の平和を実現させることが出来る、という。つまり、「世界平和の祈り」という「となえ言葉」を、平和運動において最も有効な方法としたのである。この「祈りによる世界平和達成運動」（同・五八三―五八四頁）こそ、五井の思想の根本、根幹であり、新宗教史上において他教団と分ける独特の（ユニークな）思想を持つ教団（教祖）と位置付けられるだろう。

さて、先行研究において、教祖・五井昌久をメインにした思想研究は本格的には行われてこなかった。五井の教団は生長の家から分派した教団だが、他教団からの思想的影響について、関連文献を示して具体的に「影響」が論じられたことはない。ゆえに、本稿によって、それらを指摘した意義は大きいと考える。

「影響」と括弧付きで記述したのは、数値で正確に定量化して表すことが難しいものだからである。しかしながら、諸文献から該当箇所を明示することで、おおかたの人が客観的に「影響」として納得し得るような論証が行えたのではなからうか。

とりわけ意義深いのは、五井の思想形成にあたり、世界救世教の「浄化作用」という考え方の「影響」が鮮明に見えてきたことである。五井自身は「独創的な教え」として「消えてゆく姿」というものを説いた。しかし、前述のようにこの考え方と似た教えは他の教祖（谷口、岡田）によっても説かれている。違いは、五井のほうが自らの「教義」の柱として「消えてゆく姿の教え」を前面に押し出し強調した、ということだろう。世界救世教では、「浄化作用」がはつきりと説かれ、同様の教えは世界救世教から分派した教団群にも見られる可能性がある。具体的には、崇教真光や世界真光文明教団など世界救世教系教団である。「浄化理論」については、教祖の思想研究に関する課題として、岡田茂吉の『明日の醫術』を読み直し精査するなどして、さらに検討していきたい。

本稿では、生長の家、世界救世教、千鳥会、心霊研究グループ等と「影響関係」の線が結べることを確認した。世界救世教の信者として「手かざし」を行っていた五井のことを、「世界救世教に近い人物」と見る心霊研究グループ関係者もいる。分派の概念ではなく、その思想的実践的類似性から、「大本系」に「世界救世教系」を加味して考える余地があるのかもしれない。尚、白光真宏会の草創期の会員には、生長の家の信徒のほか世界救世教の信者、日本心霊科学協会会員だった人も含まれていた。戦前、日立製作所の工場に五

井が勤務していた時に『明日の醫術』を五井に渡した女性は、世界救世教の信者であったが、のちに白光真宏会の講師となった。

五井に対する思想的影響を考えると、幼少時より様々な「影響」が存在し、その強弱もまちまちである。他教団以外にも、歴史上の偉人、親族等、広くとれば数え切れないであろう。

しかし本論文では、敗戦からの数年間、特に五井が「宗教遍歴」した時に受けた「他教団（教祖ら）からの思想的影響」に焦点を絞った。この時期に五井が接した世界救世教（岡田）、生長の家（谷口）、千鳥会（萩原）、心霊運動（スピリチュアリズム）が、のちの白光真宏会（五井）の思想形成において「影響」を与えた、と考えたからである。そして、それらからの「影響」はある程度明らかになって来た。

最後に、教祖の思想形成の背景について考えてみたい。

まず、新宗教教団の教祖がすべて「天啓」によって全く新しい独自の教えを生み出しているわけではない、ということである。教団および教祖がその独自性・獨創性を主張したとしても、教祖が「教義」を打ち立てるには、それに先立つ思想からの「影響」が存在する。これは、どの教団においても言えることではなからうか。五井の場合もそうであった。

教団の系統から見ると、白光真宏会は「大本系」であり、「大本」の延長線上に位置する。このことは、逆に言えば、元の「大本」教団に向かつて遡っていくところに、「思想的影響因子（ \approx 大本DNA \approx のようなもの）」が存在する可能性を示唆している。「大本系」ならではの思想的特徴が同系教団群のなかに伝播していると筆者は考える。しかし、これらを全て明らかにするのは、たいへん困難である。なぜなら、「大本系」に当てられている教団各々の思想特徴を把握する必要があるからである。各教団の主要教典にアクセスし、思想を分析することが求められる。しかしながら、今後は、五井が所属した教団や出会った人物（教祖）に限らず、広く他の「大本系」教団との思想比較の中で、共通する「思想的因子」を見出ししていきたい。「大本系」教団群において、時代が下りながら、教祖（思想家）間でそうした「因子」の継承が行われてきた、との仮説を検証する。この検証において、常に留意するのは、教祖・五井昌久の思想との「連結点」である。どういう思想が、どのような経路を経て、五井の思想へと至ったのかを解明したい。目論見としては、「大本系」ゆえに、「霊」の思想、「霊界」思想に着目しながら、個別に他の「大本系」教団教祖の思想を検

討していくことになる。そうした中で、「大本系」教団群における白光真宏会・五井昌久の思想的位置付けを行う。本研究を深めることで、新宗教教団における「大本系」の思想的特徴が具体的に浮かび上がるだろう。各教団の文献を横断的に閲覧して「共通の思想因子」を見出し、新宗教研究がさらに一歩進められることを目指したい。

註

- (1) 一九五一(昭和二六)年に「五井先生讃仰会」として結成され、一九五五(昭和三〇)年に宗教法人化。一九五六(昭和三一)年に「宗教法人白光真宏会」と名称変更した。本部は千葉県市川市にあったが、一九九八(平成一〇)年に静岡県富士宮市へ移った。同会関係者によると、国内の会員数は、二万人程度という。

- (2) 五井あるいは白光真宏会を扱った学術論文に、ロバート・キサラ「新宗教の平和思想・一般信徒の意識と行動」(博士論文・東京大学、一九九四年)、熊田一雄「宗教心理複合運動における医療化の問題——白光真宏会の場合——」(『愛知学院大学文学部紀要』第二九号、愛知学院大学、一九九九年)、熊田一雄「白光真宏会とジェンダー——規範からの自由について——」(愛知学院大学人間文化研究所編『人間文化・愛知学院大学人間文化研究所紀要』第一五号、愛知学院大学、二〇〇〇年九月)、岡本圭史「出来事を生み出す教団機関誌——一九七〇年代の白光真宏会の事例から」(日本宗教学会編『宗教学研究』第八四巻第四輯、日本宗教学会、二〇一一年三月)、岡本圭史「信仰を支えるもの——白光真宏会における信者達の実践と語り」(日本宗教学会編『宗教学研究』第八六巻第一輯、日本宗教学会、二〇一二年六月)、等あるが数は少ない。書籍では、津城寛文『鎮魂行法論——近代神道世界の靈魂論と身体論』(春秋社、一九九〇年)、沼田健哉『宗教と科学のネオパラダイム——新新宗教を中心として——』(創元社、一九九五年)等の中において、五井昌久の生涯の概要・教えと行法・白光真宏会の活動についての基礎的内容が記されている。「教団系統」の位置付けに関しては、次の三つの先行研究を参照した。①村上重良『近代民衆宗教史の研究』法蔵館、一九七二年(第二版第二刷)(第二版第一刷は一九六三年)、②井上順孝・孝本貢・塩谷政憲・島蘭進・対馬路人・西山茂・吉原和男・渡辺雅子共著『新宗教研究調査ハンドブック』雄山閣出版、一九八一年、③井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教教団・人物事典』弘文堂、一九九六年。

- (3) 宗教法人大本には二人の教祖がおり、出口なお（一八三六―一九一八）を「開祖」、出口王仁三郎（一八七一―一九四八）を「聖師」と呼ぶ。一八九二（明治二五）年のなおの「神がかり」を大本の歴史の始まりとする。同教団の信者あるいは同教団に関係のあった人物によって、多くの新宗教教団が生まれていった。
- (4) 一九三〇（昭和五）年に立教。谷口雅春（一八九三―一九八五）が宗教法人生長の家の初代総裁（創始者）。同年三月、『生長の家』誌を発刊、『聖經甘露の法雨』『生命の實相』など多数の刊行物を出している。山梨県北杜市に同法人国際本部（生長の家、森の中のオフィス）がある。総本山は長崎県にある。
- (5) 教祖は、岡田茂吉（一八八二―一九五五）。一九三五（昭和一〇）年、大日本観音会の名称で立教。その後、教団名称を変更し、一九五七（昭和三二）年、宗教法人世界救世教となる。「浄霊」という掌かざし、自然農法、芸術活動を推進した。
- (6) 清水勇『ある日の五井先生』オンブックス、二〇〇七年（第二刷）（初版第一刷は二〇〇六年）、二二―三三頁。
- (7) 五井昌久『天と地をつなぐ者』宗教法人五井先生讃仰会、一九五五年（非売品）。五井の前半生の自叙伝である。
- (8) 一九四三（昭和一八）年、「日本浄化療法」設立「世界救世教教学部編『世界救世教』熱海商事、一九七三年…二二七頁」。
- (9) 正しい題は『明日の醫術』。岡田茂吉『明日の醫術』（第一編・第二編・第三編）志保澤武、一九四三年（非売品）を参照。
- (10) 西園寺昌美（一九四一―）は、宗教法人白光真宏会第二代（現）会長。琉球王朝の子孫・尚誠の長女。一九六五（昭和四〇）年、五井の養女となった（旧姓名・尚悦子）。一九七四（昭和四九）年、西園寺公望の曾孫・西園寺裕夫と結婚した。
- (11) 西園寺昌美『明日はもっと素晴らしい』白光真宏会出版局、一九八六年（十版）（初版は一九七九年）、一頁。
- (12) 谷口の訳書とは、原著 *Being and Becoming* を翻訳的に紹介した『新百事如意』のことである。谷口雅春『新百事如意』光明思想普及會、一九四〇年（普及廉價版再發行）（初版は一九三八年）、五―九頁を参照。
- (13) 萩原真（一九一〇―一九八一）。宗教法人真の道の初代教え主。真の道の前身は千鳥会。自伝等によれば、岩倉鉄道学校卒業後、中国に渡った。帰国の翌年、一九三〇（昭和五）年、「霊能」が出現したという。一九四七（昭和二二）年より、「霊能者」「霊媒」として「心靈実験」「交霊會」を重ねた。
- (14) 日本心靈科学協会は、一九四六（昭和二一）年一二月に発足し、翌一九四七（昭和二二）年二月より機関誌『心靈研究』を刊行。以後、現在まで同誌

- は毎月発行されている。協会設立の初期（例えば一九四七年八月）には「霊媒」（萩原や津田江山）による「物理的心霊実験」が行われていた。
- (15) 塩谷信男（一九〇二—二〇〇八）。東京大学医学部卒、医学博士。一九三二（昭和六）年五月、東京・渋谷に内科医院を開設。塩谷は医院を開業した年から、手掌よりの「放射線」を研究し、治療に応用していた、という。一九四八（昭和二三）年に萩原とともに千鳥会を立ち上げた。
- (16) 亀井三郎。「物理霊媒者」。浅野和三郎（一八七四—一九三七）と一九二九（昭和四）年に接触した際、当時二七歳ぐらいだった亀井は浅野にいくつかの「心霊現象」を披露した、という。小田秀人（一八九六—一九八九）によれば、一九三〇（昭和五）年一月三日、亀井が小田に話を持ちかける形で一緒に「菊花会」を組織することになった、という。
- (17) 谷口雅春『生命の實相 頭注版 第一〇巻』日本教文社、一九八二年（四五版）（初版は一九六三年）、一二二頁。
- (18) 「真毘」は、直霊、直毘、真霊とも書ける。五井は法話において、「なおひ、なおび」「ちよくれい」などと言っている。「直霊（五井は真毘と書いてあるが同じ）」という語を用いて「神（実相、神性、本心）」と結びつけて説明している。
- (19) 粕川章子（一八八七—一九六九）は、一九四六（昭和二一）年二月一日から、逝去した一九六九（昭和四四）年四月二二日まで、日本心霊科学協会の理事であった。海外の「心霊」関係書の翻訳を手がけた。
- (20) 五井の側近によると、機関誌『白光』一九五八年三月号誌上に、粕川の英訳による（*May peace prevail on earth!* で始まる）「世界平和の祈り（Our Prayer）」が初めて掲出された、という。同誌三二頁に掲載。
- (21) 機関誌『白光』創刊号は、一九五四（昭和二九）年一月一日に刊行。
- (22) 『白光』の創刊前、一九五四（昭和二九）年頃に、五井は、ある程度定型化された「祈り言葉」を会員に提示している。翌年中に祈りの形が定まっており、一九五六（昭和三一）年には定着、一九五七（昭和三二）年二月の号では巻頭で「教義」と並べて、「世界平和の祈り」を注釈付きで掲載している。現在の「祈り」すなわち「世界平和の祈り」の文言は次の通り。「世界人類が平和でありますように／日本が平和でありますように／私達の天命が完うされますように／守護霊様ありがとうございます／ごさいます／守護神様ありがとうございます／ごさいます」【『白光』二〇一五年九月号・表二頁】。
- (23) 中川崇風『小冊子 導きの葉 No.3 真の道の祈り—祈ぎ言の解説—』真の道、一九七〇年、二頁。
- (24) 大本祭教院編『大本神論』第一集、大本教典刊行会、一九七〇年（第四刷）（第一刷は一九六八年）、一六頁。

- (25) 世界救世教編『天国の礎』メシアニカゼネラル、一九七九年（改訂新版第六刷）、七〇頁。
- (26) 谷口雅春編著『精神分析の話』光明思想普及會、一九四一年一月（二版）（初版は同年六月）を参照。
- (27) 谷口雅春『聖經 四部経』光明思想社、二〇一二年、九一―九二頁。
- (28) 谷口雅春『大和の国 日本——占領下の啓示とその後の論策』日本教文社、一九九七年（二〇版）（初版は一九八三年）、一六頁。
- (29) 生長の家本部編『生長の家五十年史』日本教文社、一九八〇年、「年表」七六八頁を参照。
- (30) 生長の家本部編『聖光録（生長の家族必携）』日本教文社、一九六八年（改訂版四版）（初版は一九五三年）、一〇三頁。
- (31) 五井昌久『失望のない人生』白光真宏会出版本部、一九九六年（九版）（初版は一九七七年）、一二三頁。
- (32) 石井研士「となえ言葉」（井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『縮刷版』新宗教事典 本文篇）弘文堂、一九九四年、三六一―三六三頁）を参照。